



TITLE:

編輯室より

AUTHOR(S):

CITATION:

編輯室より. 天界 1941, 21(243): 296-296

ISSUE DATE:

1941-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168245>

RIGHT:

會員よりのたより

小澤天文臺の新装

(前略) 小生今迄の 26cm 反射鏡の臺を持上げまして、この度其の上に観測室を小さい乍ら作りました。別送の寫眞(本號口繪)御覽下さいませ。これで殆んど全天が観測出來得る様になり、能率も昇る事と思ひます。設計は四寸角の檜材にて高さは地上 4.5 米、観測室の一辺は 2.5m 平方(反射鏡は F₁160cm)にて、一寸せまい感じがしますが、場所もなくギリギリに大きくしました。観測室の屋根は中央より兩方へ水平に開く式で、案じてゐたよりも手輕に、非常にスムーズに動きます。これですと、木骨トタン張りのドームも出來そうに存じます。

望遠鏡の臺は、煉瓦にて 3 米弱積上げまして、丈夫になり、近き將來には赤道儀に改良致し、出來ますれば變星の寫眞觀測方面に手を出す心組であります。五月 3 日より取掛り六月 1 日白ペンキをぬり終つて、小澤天文臺の門標を掲示して完了致しました。

初觀測は五月 28 日夜の快晴を利用して致しましたが、今迄豫備の 13cm 反射でしか見る事が出來なかつた(屋根にかくれて 26cm の小屋よりは見え) Z Cam, AB Dra 其の他の星を樂々觀測出來ました事を喜んでおります。

又、本年秋は火星の接近です。1939 年度は小生の觀測室よりは見えず、手の出しやうがなく、誠に残念でしたが、本年は火星も大いに見るつもりです。

昭和 16 年 6 月 8 日

小澤喜一

編輯室より

村山翠溪翁は“近頃、天を仰ぐことの代りに、伏して地を見る學者になつて了はれた”と評判されてゐるが、之れは要するに、翁が“仰天學”を卒業された結果かも知れない。それにしても此の“伏地學者”は大變面白い研究を發表して下さるのは、吾々一同にとつても有難い。益々御健闘をいのる次第である。▲野尻氏の文は本號で終るが、しかし、讀んで見ると、アイヌ語の中に、吾々の日本語をいろいろ連想させるものがあるのを、讀者は感じられませんか？▲火星が近づいて來た。日蝕も間が無い。水野氏の記念號も、スコフィールド氏の記念號も出す準備中です。大石氏の研究文も、佐登兒氏の譯文も澤山集つて、編輯室を賑はしてゐます。(Z)